男女共同参画社会の実現に向けて

らぷらす

編集・発行／世田谷区生活文化部　人権・男女共同参画担当課
2016 年 12 月発行　世田谷区広報印刷物登録番号／第 1438 号
〒154-8504 世田谷区世田谷 4-21-27　TEL5432-2259　FAX5432-3005
制作・印刷／(株)文化工房

NO.74
2016.12

巻頭インタビュー

モデル・タレント **佐藤かよ**さん

「自分らしさ」を求めて
～マイノリティから オリジナリティへ～

座談会
～ひとりじゃない～
新たな気づきは
「世田谷にじいろひろば」から

「世田谷区男女共同参画
先進事業者賞」受賞事業者決定

らぷらすなひと

この情報紙の表紙には、目の不自由な方などへの情報提供に役立てられている
音声コード を印刷しています。

「音声コード」は紙に掲載された印刷情報をデジタル情報に変えたシンボルで、約2cm 角の中に日本語（漢字かな交じり）で約800文字の情報を記録することができます。専用の活字文書読み上げ装置を使用して音声で内容を聞き取ることができます。「音声コード」の横には、視覚障害の方が触覚によりコードの位置を把握できるよう、切り欠きを入れています。

巻頭インタビュー
モデル・タレント
佐藤 かよさん

「自分らしさ」を求めて
～マイノリティから オリジナリティへ～

性同一性障害であることで幼いころから
さまざまな問題に直面し、
自分の性（ジェンダー）と向き合ってきた、佐藤かよさん。
現在、モデル、タレントとして活躍中の彼女に、
幼いころのことやカミングアウトのこと、
性的マイノリティへの思い、
今後の展望などについて語っていただきました。

女の子とばかり遊んでいた 私が感じた周囲の「視線」

幼いころの私は人形遊びが大好きで、手に取るものは女の子っぽいものばかりでした。1歳上に兄がいますが、クリスマスのプレゼントではおねだりするものがまったく違っていました。兄は「車のおもちゃが欲しい」と言っているのに、私は「セーラームーンのお人形！」。自分としてはごく自然なことでしたが、周りの大人にしてみれば「普通の子じゃない」という感覚があったと思います。

小学3年生ぐらいから熱中した学校のブラスバンド部は女の子が多くて、私が男の子か女の子かなんて関係なく接してくれました。それがとても楽しかったですね。でも、高学年になるとそれまで少しだけ感じていた「変わった子どもを見る視線」とは違う「疎（うと）まれるような視線」を感じるようになりました。一緒に遊んでいた女の子が急に話をしてくれなくなって、私が「どうしたの？」と聞くと、「お母さんから、あなたとはあまり一緒に遊んじゃいけないって言われたの」と言われたこともありました。

また、先生からは「どうしていつも女の子ばかりと遊ぶの？」とも。「友達だし、遊びたいから遊んでいます」と答えましたが、「普通の男の子は、男の子と遊ぶものだよ。佐藤君は普通の男の子と違っているよね」と言われたんです。

そうした友達や先生の対応を経験して私が抱いたのは、悲しさやつらさというよりも、「そうなんだ。自分はいけないことをしているんだ」という気持ちでした。そんなことがたびたびあって、先生や他の大人たちとの気持ちのギャップを子どもながらに肌で感じていました。

学校に通わなくなっても 私を支えてくれた家族

中学校に進むと直面したのが、男子用の制服、いわゆる学ランの問題でした。着るのが嫌だったので母に相談すると、先生に話をしてくれました。周りの友達も「佐藤さんを女子の制服で通わせてあげてほしい」と先生に言ってくれたのですが、許しが得られませんでした。ジャージ登校もNGだと言われ、「もう学校なんて行かない！」と思ってしまいました。それでも、放課後のブラスバンド部には未練があり、「授業に出られなくていいから、せめて部活動だけは出させてください」とお願いをしましたが、先生からは「部活動というのは、学校に来て勉強した生徒たちにだけやる権利があるんだ」と言われてしまいました。その言葉はとても悲しかったです。

また、部活動の顧問の先生が、「佐藤くんは性同一性障害という病気だから優しくしてあげてね」と、仲の良い先輩や友達の前で言ったことを人づてに聞きました。それもとてもショックでした。

こうしたことがあって、私は中学校に通うのをやめてしまい、昼間はコンビニでアルバイト、夜は遅くまで友達と遊ぶという生活を送るようになり、短期間の家出を何度も繰り返していました。

学校に通わず、ギャルファッションに身を包むようになりましたが、それでもありがたいことに家族は私を見捨てませんでした。

母には、言葉にできないくらいの深い思いがあります。思春期のころ、母とは小さな喧嘩が絶えませんでしたが、制服の件で学校に働きかけてくれたことをきっかけに、徐々に向き合えるようになりました。性同一性障害ということがはっきりしてからも、婦人科の先生に相談をしてくれるなど、私のことを支えてくれました。

兄と私は家ではあまり話をしませんでしたが、私がカミングアウトするまで、「あいつが男だってことは言わないでやってくれ」と周囲の友達に必死に口止めをしてくれていたと後で聞きました。そのときは、とてもうれしかったです。

モデルになって直面した カミングアウト問題

憧れていたアパレルショップ店員に仕事が変わってしばらくしたある日、雑誌社にスカウトされてモデル事務所に入りました。そのことが私の運命を大きく変えました。

余計なことを考えずに、自分を素敵に表現することだけに没頭できるモデルという仕事は、とにかく楽しかったです。でも、上京後に顔が知られ始めると、私の昔を知っている人から「あの人、実は……」という反応がちらほら伝わってくるようになり、やがて性別を隠しきれない状況になっていったのです。

秘密を知られずに生きていこうとするなら、好きなモデルの仕事はや

佐藤 かよ
1988年生まれ。愛知県出身。出身地である名古屋で女性ファッション雑誌のモデルとしてデビューし、人気を集める。上京後に、テレビ番組内で自らが男性であることをカミングアウトして大きな話題に。現在、モデルを中心に、タレント、女優などとしても活動し、活躍の場を広げている。特技は、全国大会第2位という実績もある格闘ゲーム。

めなきゃいけない。でも、好きな仕事を続けていくなら、カミングアウトするしかない。この二つの選択でものすごく悩みました。

そんなときに背中を押してくれたのが、地元の親しい友達の言葉でした。「男だろうと女だろうと、友達として大事に思っている」という言葉がけがエンジンとなったのです。そして、事務所の社長とも相談した上で、テレビ番組でカミングアウトすることになったのです。

カミングアウト後の反響が心配でしたが、これまでと同様、一人の女性として仕事を続けていくことができたのでホッとしました。

性同一性障害に限らず性的マイノリティの方には、悩みを抱えている方がたくさんいらっしゃるかと思います。でも、カミングアウトについて言えば、私は「早くカミングアウトしたほうがいいよ」とも「私と同じようにするといいよ」とも言いません。それは、カミングアウトすべきかどうか、それがいつのタイミングなのかは、自分で考えることだと思うからです。

そもそも私は、カミングアウトが「次に進むための必要な儀式」になってほしくないと思っています。一番良いのは、性同一性障害だろうと何だろうと、カミングアウトをしなくても個人が社会に自然に受け入れられていくことだと思うんです。

性的マイノリティをパターンでとらえず個人の考えを尊重すること

世田谷区のように、行政が性的マイノリティへの支援を始めているのを見ると、時代は少しずつ変わってきているんだなと実感します。性的マイノリティの方々が、正式な結婚はできなくてもパートナーシップを社会から認められるということは素晴らしいことだと思います。

ただ、ここで忘れたくないのは、性的マイノリティの方々の考えや個性を尊重するということ。結婚をしたい人もいれば、結婚にとらわれずに付き合っていきたい人もいるし、さらに子どもを持つ・持たないなどいろいろな考えがあるはずです。だから、「ゲイの人はこう、レズビアンの人はこう」などと一つのパターンで性的マイノリティを捉えるべきではないと思うんです。

すべての人はオリジナリティが尊重されることが大事で、もちろん性的マイノリティの人もそれは同じ。「マイノリティはオリジナリティ」――そんなふうに考えることが、性的マイノリティを理解する第一歩だと思うんですね。

今後の自分について言えば、モデルとしてもっとレベルを高めていきたいと考えています。今は、「佐藤かよ」の名前がまずあり、「男？　女？」みたいな部分で見られたりしていると思います。でも、モデルとして素晴らしい写真に収まることができれば、私の過去とか性別とか名前とかに関係なく、「良いものは良い」と純粋に思ってもらえるわけで、そういったレベルを目指していきたいと考えています。

将来的には、ビジネスにも興味があります。まだ何をどうするのか明確なことは決まっていないんですけど、世の中でバリバリ働いている女性や起業している方を見ると、私もそうなりたいと思うんです。今の私は、まだまだ人生の序章に過ぎなくて、段階が10あるとしたら今は3ぐらい。これから働く女性として、さらにステップアップしていきます！

～ひとりじゃない～ 新たな気づきは「世田谷にじいろひろば」から

LGBTについての情報が発信される機会が増え、その認識は広まりつつあります。しかし偏った情報も多く、当事者の方を取り巻く状況は未だ改善されていないのが現状です。わたしたちがLGBTについて正しい知識を学び、平等な社会を築くために何が必要か？その答えのヒントを、世田谷区との協働事業を「世田谷にじいろひろば」として活動している3つのLGBT支援団体の皆さんにお聞きしました。

誰にも相談できない葛藤の日々 カミングアウトは本当に難しい

下平さん：ゲイだと自覚したのは、高校3年生。体育で男子が活躍する姿にときめく感情は憧れだと思っていました。でも、女子と付き合ってみてはっきりと気づいたんです。それからは、いろいろと悩んじゃいました。特に、僕は長野出身なのですが、地元で一浪していた時はすごく悩みました。両親がいなくて祖母に育ててもらったから、結婚して家族を作ることで恩返しをしたいと思っていたんです。でも自分がゲイということを認めてしまうと、ひ孫は見せられなし、恩返しも出来ない。この先就職しても誰のために働くのか、ずっと一人なのか、それなら何のために大学に進学するのかのループでした。

大賀さん：田舎だと、周りにセクシュアルマイノリティがいないから、誰にも相談できないんですよね。私も田舎で育ったから、その気持ちはすごく分かる。私は男性でも女性でもないXジェンダーという性自認を、21歳まで言わずに隠して生きてきましたから。

下平さん：僕のカミングアウトの最初の相手は元彼女。受験を理由に別れたんですけど、納得してくれなくて、時間をかけて相手に分かるように伝えて「ゲイなの？」「うん」って。「言ってくれてありがとう。少し近づけた気がする」って言ってくれたから、救われたんですよね。

大賀さん：私は学生時代に、カミングアウトしたのに、周りにスルーされた。それでも40代の同級生が、すごく理解してくれて。彼女のおかげで自分のことに向き合えるようになりましたね。

座談会出席者
特定非営利活動法人共生社会をつくる
セクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク
代表　原ミナ汰さん　理事　大賀一樹さん
特定非営利法人ReBit
理事　下平武さん
特定非営利法人レインボーコミュニティ coLLabo
理事　加澤世子さん　村田悠さん

自分を肯定できないのは 差別や偏見が自分の中にもあるから

原さん：カトリックの高校にいた時、合宿で一緒になった友人にカミングアウトをしたことで、そのことが広がって大騒ぎに。すぐに先生が来て個室に移動させられて、見張りもつけられて、培った友情も消えてしまった。大人の過剰な反応を見て、みんなもびっくりしたんだと思う。

加澤さん：それは女の子が好きだという理由だけで？　誰も止めなかったの？

原さん：そう。本当に死にたいと思った。でも後にレズビアンの友人たちが「あなたは間違ってないし、話しをしてくれて良かった」って。その言葉で救われたけど、トラウマになるには十分だった。それからはトランスジェンダーということを隠して、4、5年は、女性として生活をしていたかな。正直こんなことが何回もあったら生きていけないと思った。それにカミングアウトしても、結局自分が自分のことを受け止められない限りはこの悩みは尽きない。

加澤さん：結局、自分を肯定できずにいるのは、LGBTへの差別や偏見が、自分たちの中にもあるから。

下平さん：本当にそう思う。子どもの時はホモネタなんか話していて、同性愛者であることが笑いの対象になることを知っているわけではないですか。でも、その中で、自分がゲイだと自覚し、それを認めるということは苦しかった。

大賀さん：自分がLGBTだと自覚してからは、〝隠れて生きていくしかない〟という気持ちと〝本当の自分で生きたい〟という相反する気持ちが常に揺れ動いており不安だった。そう考えると、認めてくれる人との出会いは、すごく重要だと思う。

加澤さん：何かきっかけがないと、

自分を受け入れることは難しいよね。自分自身と向き合えることで、カミングアウトできる人もいるだろうし。

原さん：私は、しばらく女性として生活し、出産、授乳を経験し、それでも自分の性別感覚には変化がないことを知った。それで、やっと自分を受け入れることができた。それからは、カミングアウトして、拒否されても平気になった。

加澤さん：原さんが60代、私が40代、彼らが20代。これだけ世代が違うし情報も増えていけるけど、時代が変わっても世間は変わっていないんだよね。

暮らしの中での違和感や不便は今も昔も変わらない

加澤さん：今も昔もＬＧＢＴであることで、日常の性的違和感や生活の不便は本当に多いよね。

大賀さん：学校では、どちらのトイレも入れなくて、1日我慢していましたよ。ファッションも、男か女か分からないビジュアル系の格好をしていたから、余計に目立ってしまいました。

原さん：制服もそう。スカートを履きたくないから、私服の高校に行くとか。でも、なんで私服の高校に行きたいか、両親には言えない。

原さん：不動産はパートナーと行くと、借りられない物件も多いし、病院でも、緊急時にパートナーが署名できるのかという不安も。

大賀さん：地方よりは東京の方が、多様性があるから生きやすいんだけど、暮らしの中での違和感は、やはり現実的にあるんですよね。自分らしく生きようと思うと、特定のコミュニティに行くしかない。

下平さん：まさに「世田谷にじいろひろば」は、そんな安心な場所を作りたいよねって、進めてきた活動。定期的にこんな場所があるのが大事だよねって。

区が関わることで安心できる居場所に

原さん：場所づくりで最も重要なのが、ＬＧＢＴであることを受け入れてくれる環境。多数派の中で生活していると傷つくことは日常的。ＬＧＢＴの人たちが、自身を肯定できるような居場所が大事だと思う。

加澤さん：それが自分のためでもある。「世田谷にじいろひろば」に関しては、その環境づくりに世田谷区が関わってくれるところが嬉しい。

原さん：民間団体だけで活動していると、どんな団体なのかと心配される人たちもいるから。区との協働だからこその安心感がある。

下平さん：各団体が一緒にできたことも良かったですよね。講座も偏らず幅広くできましたよね。

大賀さん：それぞれの個性を活かしたことで幅も広がったよね。いろんな方が来てくれました。

下平さん：僕のところでは、子どもに関わる全ての大人にＬＧＢＴの知識を知ってもらう講座やワークショップを行ったんですが、将来教育に関わろうとしている学生が来て、「勉強になりました」と言って帰っていくのを見て、頼もしいなと思いました。

原さん：当事者でないと理解できないこともたくさんあると思う。私たちだって偏見はあるしね。ただ、社会全体に必要な知識として、正しく学んで欲しい。

下平さん：まずは、大人が適切な知識を持つことが必要。会社の上司や先生などは特にそう。適切な知識を持っている人に出会えることで救われる。

加澤さん：だからこそ、誰もが安心して来れる「世田谷にじいろひろば」は必要。

下平さん：世田谷区のパートナーシップ宣誓も同じだと思う。セクシュアルマイノリティがこの区に住んでいいんだと思えたという声も聞きます。祖母に「良かったじゃない！ 世田谷に住みなさい」って言われました。

加澤さん：特にパートナーシップ宣誓の取組みから、携帯の家族割が利用できたり、保険に入れたり、民間企業が動いたのも大きいよね。

原さん：世田谷区にはセクシュアルマイノリティが安心して訪れられる場所がある。一人ではないということを、一歩踏み出して相談して欲しい。そこには、仲間や応援してくれる人たちがたくさんいるということを知ってもらいたい。

用語解説

セクシュアル・マイノリティ
性同一性障害（「身体の性」と「こころの性」が一致しない状態）の人や恋愛感情などの性的な意識が同性や両性に向かう人（同性愛、両性愛）など。

トランスジェンダー
身体と心の性別に差がある人。性同一性障害は医学用語。

ＬＧＢＴ
レズビアン（女性に惹かれる女性）、ゲイ（男性に惹かれる男性）、バイセクシュアル（女性も男性も性的対象）、トランスジェンダー

「世田谷区男女共同参画先進事業者賞」受賞事業者決定

区では、全ての人が家庭・地域・職場で、自らの意欲と能力を活かし、その人らしく、いきいきと働き暮らすことができる社会をめざすために、ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和）を推進しています。その実現には、働く場としての企業の理解や取り組みの促進が重要です。

仕事と生活の両立支援や、女性の能力活用などに積極的に取り組む「平成 28 年度世田谷区男女共同参画先進事業者」が決まり、表彰式を10月15日(土）に世田谷区産業表彰式と合同で開催しました。

株式会社 三恵

太子堂2-16-6
☎3413-6119

代表：飯島 祥夫　**創業：**昭和28年
業種：小売業　**社員数：**33人
http://www.sangendyaya.co.jp

表彰理由

1. 非正規社員から正規社員への登用制度を導入し、働きたい女性を支援している。
2. 雇用形態にかかわらず管理職への登用をしている。
3. 部署を超えたコミュニケーションの場を設け、活性化させ風通しの良い職場環境づくりに努めている。
4. 在宅勤務の実施に向けた働き方改革を推進している。

小杉造園 株式会社

北沢1-7-5
☎3467-0525

代表：小杉 左岐　**創業：**昭和18年
業種：造園業　**社員数：**79人
http://kosugi-zohen.co.jp

表彰理由

1. 技能五輪国際大会における世界初の女性社員の参加をきっかけとして、世界で活躍できる女性を育成している。
2. 非正規社員であっても、正規社員と同等の仕事をしていれば正規・非正規の分けなく海外研修を実施している。
3. 資格取得に向けた技術支援を組織として積極的に行っている。
4. 女性カウンセラーによるカウンセリングを毎月定期的に実施し、働きやすい職場環境の整備をしている。

株式会社 澤速記事務所

北沢2-22-13XA ビル3階
☎3413-5821

代表：澤 吉昭　**創業：**昭和41年
業種：速記・情報サービス業
社員数：41人
http://www.sawa-sokki.co.jp

表彰理由

1. 管理職全員が女性である。
2. 資格取得に向けた組織的な指導や事務所内に教育機関を設置するなど人材育成に力を入れている。
3. 在宅勤務や現場への直行・直帰など多様かつ柔軟な働き方による仕事と家庭の両立を支援している。
4. 育児・介護休業取得者に対して研修期間を設け、必要な教育訓練を行い復職を支援している。

らぷらすな ひと

アクセサリーづくりで起業し、有意義な人生を送りたい

ハンドメイドアクセサリー作家
mika.kami.mika 代表
高橋みかさん
MIKA TAKAHASHI

私は〝mika.kami.mika〟というブランドを立ち上げ、ハンドメイドのアクセサリーやジュエリーを制作・販売しています。世田谷区内のイベントに出展するとともに、結婚式のジュエリーをオーダーメイドで制作しています。

アクセサリーづくりは子どもの頃から好きでした。3年前に妊娠を機に勤めていた会社を退社。妊娠中は好きなことをやりたいと思い、アクセサリー制作を本格的に再開しました。

育児をしながらも社会とのつながりをもちたい。そう思っているときに、通っていた桜新町の子育てステーションで情報紙「らぷらす」に出会い、女性起業家支援の制度を知ったのです。

男女共同参画センターらぷらす主催で、年に一回実施している「起業ミニメッセ」というイベントで販売を行うとともに、起業セミナーや専門家の相談制度を活用しています。ともに起業を目指す仲間がいるので、ネットワークも広がって嬉しいです。

私の目標は自分の会社を創業することです。現在は自分で制作していますが、将来的には自分のデザインしたアクセサリーを外部で製造し、広く販売していきたいと考えています。海外への展開も視野に入れています。

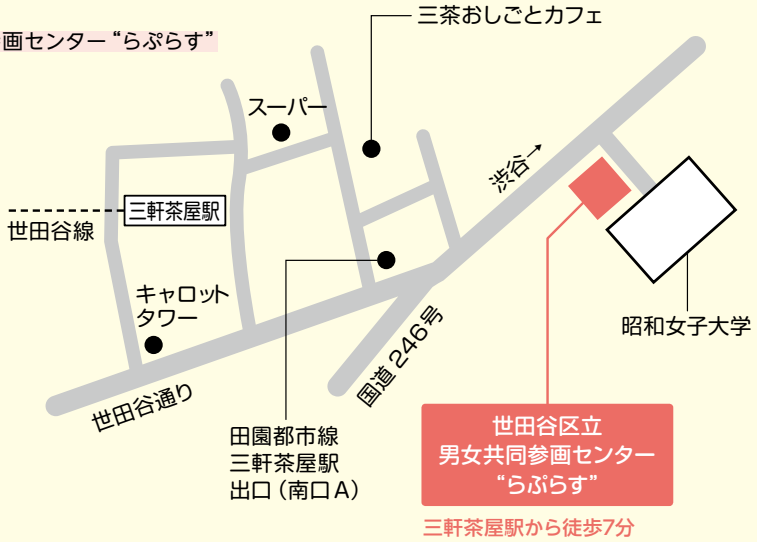
ママさんたちには、自分がやりたいことを大切にしてほしいですね。できないと決めつけずに、とりあえず挑戦してみてはいかがでしょう。家族の理解と協力を得ながら、育児とのよいバランスをとることはできると思います。

天職であるアクセサリーづくりを仕事にして、出会った方とコミュニケーションを深めながら、有意義な人生を送る。そんな生き方を目指していきます。

世田谷区立男女共同参画センター“らぷらす”

〒154-0004　世田谷区太子堂1-12-40　グレート王寿ビル3～5階
☎6450-8510　FAX 6450-8511
【開館時間】午前9時～午後10時
【休 館 日】毎月第3月曜日および年末年始
【施設概要】研修室、情報・交流コーナー、子ども室、資料コーナー、授乳コーナー　ほか
【らぷらすホームページ】http://www.laplace-setagaya.net/
世田谷区ホームページ→施設→暮らし・生活関連施設→男女共同参画センター“らぷらす”
をご覧ください

女性のための相談事業

相談室では、暮らしの中の悩み、就職・転職、仕事と家庭との両立など女性が抱える悩みについて相談事業を行っています（要予約・相談料無料）。

女性のための悩みごと相談	働きたい・働く女性のためのキャリアカウンセリング相談	女性のための働き方サポート相談
毎週水曜日	第1・第3土曜日	第2・第4火曜日
13:00～20:00	10:00～16:00	
面接相談(予約制) 相談当日の11:00～18:00に電話で ☎6453-1813	面接相談の予約(前月1日～相談日前日) ☎6450-8510 当日の面接相談の予約(当日のみ) ☎6453-1813